

# THE PINHOE EGG

## Chap.1~5

### Chapter One

#### Summary

夏休みの初め、Marianne と Joe は Woods House の Gammer によばれる。Marianne は、一族唯一の直系の女の子で Gammer の後継者として期待されているのでわかるが、Joe は機械にばかり興味を示す一族の中では落ちこぼれだったので、腑に落ちずにいる。Gammer の庭では、不思議な匂いがしている。二人に会うと Gammer はまず、Joe にクレストマンシー城で Big Man (Chrestomanci) の靴磨きとして働くように命じる。Joe の仕事は、彼らのスパイとなること、ピンホーが魔法使いの一族であることに気が始めたそぶりを見せたら、ガマーに報告することである。一方、Marianne は、朝から晩まで Gammer と共にいることを命じられる。2 人とも、これらの仕事をしたくはなかったが、Gammer の魔法と気迫に負けて了承してしまう。

彼らが話してる最中、Gaffer Farleigh、Gammer Norah、その娘の Dorothea がフロントルームに押しかけてくる。彼らは、ガマーが何か間違いを犯したと怒っていたが、Gammer はそれを否定する。Gammer と Farleigh らが言い争いお互いを非難しあっている間、Marianne と Joe は Nutcase と一緒に部屋の外で聞き耳を立てる。突然、Farleigh たちに向かって彼らが後ろによるめくほどの魔法が投げつけられ、それに対抗して、Gaffer Farleigh も Gammer に魔法を投げかける。Farleigh 達はそのまま逃げるように去り、Gammer が変になってしまう。

Joe が Furze Cottage にいって知らせるよりもはやく、噂が広まり、まもなく、ピンホー達が Woods House に到着し、何が起こったのかをみにきて、相談を始める。叔母達は皆、サンドイッチと共に現れた。マリアンヌはそれら到着する人々にいきさつを話すのに急がしいが、叔父、叔母達は Gaffer Farleigh が Gammer に魔法をかけたことが信じられないようである。大叔父も到着するが、彼らですら、Gammer をどう対処していいかわからない。そんな中、Joe は Marianneni 奇妙な頼み事をする。フェレットの剥製をとるので、その代わりにフェレットの幻をケースにだしてくれというのだ。Marianne は渋々承知する。ほとんど作業が終わりかけたところへ Edger 大叔父が登場し、Gammer は専門的にケアを受けることに決まったと伝える。サンドイッチのバスケットにフェレットをかくした Joe は、Nutcase をつれてかえると言い訳して、Marianne とともに家に帰ろうとする。Marianne は後から Nutcase をつれてかえるから先に帰っててといい、それに対して叔父は、明日から Joe は城で働くのだから帰ったら荷造りをしなさいといい、夏休みの Gammer の計画がおじゃんになってなかったと知って驚く Joe を帰す。

## Words and phrases

|                        |             |  |
|------------------------|-------------|--|
| Reluctantly            | 渋々          | They walked reluctantly up the street    |
| Summon                 | 招集する        | They had been summoned by Gammer         |
| Bet                    | ~と思う        | Some new stupid thing, I bet             |
| Odour                  | 香り          | She could smell the odour of the spell   |
| Spell                  | 呪文          |  |
| Sulky                  | すねた         | Joe put on his most sulky look           |
| Make sense             | 意味をなす       | It makes sense she wants you             |
| For that matter        | その理由で       |  |
| Make a face            | しかめっ面をする    | Marianne sighed and made a face          |
| Drive                  | 道           | They turned up the weedy drive of W.     |
| Insist on              | 主張する, 要求する  | Gammer insisted on living alone.         |
| Stuffed                | 詰め物をされた     | The animals had been stuffed with savage |
| Savage                 | 獰猛な         | snarls on their faces.                   |
| Snap                   | ぴしゃりと言う     | “Yes, you are!” Gammer snapped.          |
| Grim                   | 厳しい         | Farleigh looked grim.                    |
| be bothered to do      | わざわざ~する     | They are bothered to come to the door.   |
| shove                  | 押しつける       | Norah shoved Joe against the wall.       |
| absurd                 | ばかげた        | I never heard anything so absurd.        |
| fetch                  | 連れてくる       | Joe went Furze Cottage to fetch Mum.     |
| get sick of            | ~がいやになる     | Marianne got sick of telling it.         |
| on second thoughts     | 考え直してみると    | On second thought, I think ----          |
| upset                  | 混乱した        | Pretty upset, isn't she?                 |
| row                    | 仲違い、口論      | What was the row about?                  |
| all but one            | 一つ以外        | He had eaten all but one.                |
| do a favor             | 頼み事をきく      | Can you do us a favor?                   |
| All the same           | それでも、やはり    | I think her mind is going, all the same. |
| know better than to do | ~するほどバカではない | She knew better than to ask joe.         |
| Be bound to do         | きつと~する      | He was bound to notice.                  |
| see to                 | 引き受ける       | I'm off to see to it.                    |
| assume                 | 推測する        | They assumed that the plan had gone.     |

## Chapter Two

### Summary

Joe の後を Marianne は追おうとするが、さまざまな人に用事をいいつけられてしまう。Reverend Pinhoe が Gammer のために Dr.Callow を呼ぶことを提案する。Dr.Callow には、長いケアが必要で すねって言われて終わる。またも、サンドイッチをおばたちは作りに台所へ戻るが、パンが残ってお らず、サーディンだけ残っていた。そして、Joe を羨ましく思うのだった。(28-29)

そんな Marianne が戻ってくるたび Nutcase は彼女を温かく迎える。また、Marianne は Joe が取 っ ていってしまった ferret の代わりに作った魔法の幻像が気になってしまうのだった。

そんな中、Great Uncle Edger が二人の nurse を引き連れて到着。Gammer が騒ぎ始めるが、二人の nurse も含め誰も対処できない。唯一 Aunt Dinah だけが扱えるようだ。Dinah は Gammer に Soothing Spell をかけて Gammer を落ち着かせる。また、Gammer は二階へあがる際、Marianne に対し Nutcase の面倒を見るよう指示する。その後すぐ Marianne は Mum と Dad、Nutcase とともに家に 帰ることが出来たのだった。(30-31)

平和主義者で Richard 叔父と家具を作るのが生きがいの Dad と違い、Mum は平和主義者とは程 遠い。Dad との口論で思わず、Marianne がいるにもかかわらず、自殺した Gaffer のことまで口走っ てしまう。(重要箇所：訳参照)

その夜、Marianne は Gaffer のことについて考える。幼かった Marianne には彼は自分の道を進む 強い人のように見えたことを思い出す。彼は生前、Molly と一緒にいて、色んなハーブを集めていた ことで有名だった。彼の本当の名前を知らないことにもきづく。Marianne はいつも日曜日の昼食の 後彼の膝の上に座っていたこと、台所で Mum と Gammer が口論していたことなども思い出す。また、 彼からもらった “truffle” が食べられず、Gaffer をがっかりさせたことも思い出した。(31-34)

翌日、Nutcase の失踪が発覚。Mum は Joe が Chrestmanci 城に行く準備をするのに忙しい。一方 Joe はめっちゃ不機嫌。休暇をまるまる無駄にすることが嫌なのだという。ともかく Joe は出発する。

Marianne は Nutcase を探しに Woods House へ向かう。そこでは二人の nurse が怒っていた。 Gammer がふたりをポルターガイストしているのだと言う。すると、盆や長時計が nurse めがけて飛 んできたり、Gammer はドアに向かって走ったり・・・。Marianne は Gammer をつかまえて諷めよ うとする。「nurse 達に物を投げるのをやめると約束しなければ、Gammer になることを考えないし、 ロンドンへ行って働くわよ！」と脅しをかけて、ようやく Gammer は約束をする。そこへ Mum,Helen,Polly,Sue,Edger がやってくる。その他の人も集まり、また一族会議。Marianne は Aunt Joy を連れに行かされる。そして、Marianne は Nutcase を見つけて、Furze Cottage へ帰る。そし て Marianne は涙を流すのだった。

Mum,Dad が帰ってくる。Nurse 達は、二倍の給料と、Aunts の誰かが常に守ることを約束に、もう

一週間滞在することになったらしい。(34-41)

が、二晩しか続かず、Nurse 達は去って行った。

緊急会議！

その間 Marianne は自分の部屋で “The Adventures of Princess Irene” を書いていた。

～緊急会議の内容～

まず、Great Uncle Edger が Woods House に移って Sue が面倒をみると言い出すと、Sue は拒否する。そこで、唯一可能性のあるのは Gammer が息子達と暮らすこと。すると、Mum も含めて Joy, Helen, Prue, Polly は口々に逃げ口実を言い始める。Great Aunt Clarice までもが。

そんな中、Dinah と Isaac が引き受けてくれることに。その話を聞いた Gammer は Woods House を離れないと主張。が、Dinah によってベッドに連れ戻される。

そして明日その引っ越しをすることが決められた。でも、その前に、Great Uncle Edger が Woods House に住み込むと言って一悶着起こす。しかし、Woods House は Dad のもので、今は Gammer を住まわせているだけだと Dad は告げ、Woods House を売ってそのお金を Dinah と Isaac への資金提供とするつもりなのだという。(42-44)

この会議は “Flaming Row” (by Richard), “a bit of difficulty” (by Dad) と形容された。

## Words and phrases

|                      |           |   |
|----------------------|-----------|---|
| grocer               | 食料雑貨店     | Marianne was sent off to the grocer   |
| take turns at        | 交替で～する    | Aunts would take turns at doing it  |
| cope                 | 対処する      | Dinah seemed to be able to cope.  |
| take to              | ～にふける     | He took to going off into the wild  |
| do away with oneself | 自殺する      | He got himself done away with.  |
| dodge                | 避ける       | The nurse dodged.   |
| distract             | 散らす       | Gammer distracted her by rushing down the stairs.                           |
| Retort               | 言い返す      | “Yes, but---” Aunt Joy retorted.  |
| Provided             | もし～ならば    | The nurse were persuaded to stay, provided aunts were there to protect them |
| Give notice          | 知らせる、通告する | The nurses finally gave notice.   |
| Get wind of          | ～の噂を耳にする  | Gammer somehow got wind of their decision.                                  |
| Understate           | 控え目にいう    | Dad was always given to understating things.                                |

## 重要箇所全訳

“Dad was a great one for ----- mind or no mind.” 31-32

Dad は平和への偉大な支持者だった。彼が人生に望むことは、Uncle Richard をパートナーとして美しい堅固な家具を作って過ごすことだけだった。Furze Cottage の後ろの倉庫でその二人は様々な家具を作っていた。座っている人を心地よい状態にし続けるような椅子、使う人が幸せな気持ちになるようなまじないがかかった机、埃をためない戸棚、防虫された洋服だんすやその他多くのもの。この前の彼女の誕生日には Dad は Marianne に素晴らしい、ハート形の書き物机を作ってあげたのだ。それには、隠された引き出しが付いていて、本当にその引き出しは隠されているのだ。つまり、正しい呪文を知らない限り、誰もその引き出しを見つけることさえ出来ない。

けれども、Mum は Dad のような平和愛好者にはほど遠かった。

「ふーん！」と Mum は言った。「彼女は問題を起こすために生れて来たのよ、火花が上に飛ぶくらい自然な事だわ。Gammer は。」

「さあ、Cecily」Dad は言った。「君が僕の母親を好きじゃないってことはわかっている・・・」

「好きかどうかの問題じゃないのよ」力強く Mum は言う。「彼女は Hopton Pinhoe なのよ。あなたのお父さんと結婚するまでは浮ついた町っ子だったのよ。お父さんに大変迷惑をかけて、彼女はやった、あなたも知っているでしょ Harry！彼が荒野へと行くようになって、自殺したのは彼女のせいなのよ、もしあなたがきくのならば」

「さあ、さあ！Cecily！」Dad は Marianne がいることを知らせるように、言った。

「あー、私がそれを言ったってことは忘れて。」Mum は言った。「でも彼女が落ち着くなら驚きだわ、正気であろうとなかろうとね。」

## Chapter Three

### Summary

ピンホー一族は早朝、Pinhoe Arms の庭に集合して仕事にかかった。Woods House からものを運び出す班や、Dell( Dinah おばさんの家 )に Gammer の品を運ぶ班、Gammer の部屋を準備する班( Joe ら ) や、Gammer を運ぶ班 ( Marianne ら ) に分けられた。出入りが混乱する中、二階では Gammer が、ベッドに根付いてしまう。Marianne の父さんは怒って、先に家具をすべて運び出すように指示するが、屋根裏は手つかずのままになる。Dell からはしびれを切らした母さんが Nicola という幼い女の子を使いによこす。

おばあさんが依然として根付いたままなので、父さんはいよいよ起こり、浮遊のまじない( Levitation Spell )を使うよう皆に命じる。おばあさんは、自分を非常に重くし、皆が集まって全力をだしたときに、重さを抜く。ベッドは Arthur おじさんを振り切って家を飛び出し、Lester おじさんの車にぶつかって止まる。一族は、もう一度浮遊のまじないを使っておばあさんを運び、人々の注目を集めながら、丘からおろしていく。

ベッド運搬隊の後から、台所のテーブルに追いかけて半狂乱になったロバの Dolly が荷車を引いてかけてくる。ロバは Dell への道にそれで助かるが、テーブルは郵便局の壁に衝突し、はまり込む。激怒した Joy おばさんが、Gammer を呪おうとするのを、父さんが止める。大テーブルは巨大なため、Woods House の一部も破壊して出てきたことが判明する。

4 時ころデルにつくと、Gammer は Dinah おばさんに挨拶し、歓迎される。父さんは、おばあさんが家から出られないよう呪文をかける。皆で帰りに大テーブルを郵便局の壁からひきぬいて運び、Pinhoe Arms に寄って飲食する。Marianne は、Joe に、城での暮らしの様子を訊く。Joe によれば、仕事をさぼるのは楽で、クレストマンシー一家は明日帰ってくるが、子供の中で魔法使いはひとりである。

## 重要箇所全訳

“This was easier said ----- scamper off with Dad's message.” 49-51

これは、言うよりも実際難しかった。どんなに沢山の家具があったのか、誰もきづいていなかったのだ。Woods House 位の大きさ、かつて七人の子供がいる家族を収容したことがあるくらい十分な広さの家は、大量の家具を入れることができる。そして Woods House はそうだった。Joss Callow は Cedric 叔父の干し草用の荷車をとりに行き、それをひくため Reverend Pinhoe の年老いた馬を借りなければならなかった。なぜなら、農耕車は単純に十分でなく、それに一日かかってしまうだろうからだ。Edgar 大叔父は、誰かに彼の立派でこぎれいな車も使おうと提案されたら困るので、この時点で用心深く去っていた。しかし、Lester 大叔父は寛大にも留まって、彼の車に小さめの品を乗せると申し出た。それでも、3つすべての車が何回も Hopton 道上の大きな倉庫まで往復しなければならなかった。その間、若い Pinhoe の集団がそこにバイクやほうきで駆けでて、家具をおろし、安全に積み上げ、彼らの一番の保護魔法でくるんだ。同時に、Gammer が新しい家で必要だろうと人々が考えた沢山の品物が到着して、口バの Dolly が、荷を積んでぎしぎししているカートを後に、Woods House の間を休みなしに行ったり来たりしていた。

「慣れ親しんでいるものが奇妙な場所にあるのって本当に『素晴らしい』わね。」Sue 大叔母は言った。Marianne は、それはむしろ大叔母の感傷的気分だろうと個人的に思った。なぜなら、それらのほとんどは Gammer が使っている所などかつて一度もみたことがなかったものばかりだったからだ。

「それに、私たちはまだ、屋根裏部屋に手をつけてなかったじゃないか！」口バ馬車がもう一度戻ってくるのを待つ間、Charls 叔父がうめいた。他の皆も屋根裏部屋のことなど忘れていた。

「昼食後までほっておこう」父さんは急いで言った。「それが、新しい家主のために残しておくこともできるな。上には、がらくた以外何もないしな。」

「僕はおもちゃの要塞を持ってたことがあって上にあるに違いないんだが」Simeon 叔父は物欲しそうに言った。だが、Richard 叔父が口バ馬車を母さんからの伝言を携えた小さい Pinhoe の女の子とともに持って帰ってきたので、Simeon 叔父は大抵のように、無視されてしまった。母さんは、明らかに Gammer がいったいどうなったのか知りたくてしびれを切らしてきているようだ。

「みんなは全部準備できてるよ」小さな Nicola は知らせた。「大きかった掃除するた。」

「何をしたですって？」叔母達全員がいった。

「床を洗って、乾かして、磨いて、カーペットがびったりはまったの。」Nicola が説明した。「それで、窓を洗って、壁もやって、新しいカーテンを取り付けて、全部の家具と絵と Stuffed Trout に取りかかって、Stafford と Conway Callow が山羊を追っかけて、山羊は2人を角で突いて、それでね」

「ああ、大掃除をしたのね」Polly 叔母が言った。「今、分かったわ。」

「ありがとう、Nicola。走って帰ってみんなに Gammer がちょうど来るところだって伝えてきておくれ。」父さんが言った。

だけど、Nicola は、先に彼女の説明を終わらせようときめていた。「それでね、2人は家に帰されて、Joe Pinhoe はね、怠けてるって怒られたの。私はちゃんとしてたわよ。手伝ったもの。」と締めくくった。彼女が父さんの伝言をもって逃げるように帰って行ったのは、それからである。

Nicola の台詞 “They sprung clent.” は、spring clean を過去形にしたつもりで間違ってしまったらしい。Nicola は小さいから ^ ^

## Words and Phrases

|                   |            |  |
|-------------------|------------|--|
| be supposed to do | ～する事になっている | Her group was supposed to clean up the dell              |
| efficient         | 効率的        | It all sounded wonderfully efficient.                    |
| sort out          | 処理する       | I'll sort it out.  |
| levitate          | 浮きあがらせる    | Levitation spell   |
| transparent       | 透明な        | Her nails were like transparent yellow creepers          |
| get the better of | ～を出し抜く     | You could get the better of me                           |
| lose one's temper | 腹を立てる      | Dad has almost never lost his temper.                    |
| turn up           | 到着する       | Many things turned up.                                   |
| Junk              | がらくた       | There's nothing but junk up there.                       |
| narrative         | 語り、話       | Nicola finished her narrative.                           |
| make for          | ～に向かっていく   | As it made for the doorway                               |
| serve ~ right     | ～には当然の報いだ  | Serve you right! Said Gammer.                            |
| Embarrassment     | 当惑、きまり悪さ   | They are going to die from embarrassment.                |
| collapse          | 倒れこむ       | Arthur collapsed on the steps.                           |
| plough            | 骨折って進む     | The table ploughed on.                                   |
| dump              | どさっと落とす    | I'd dump you in the duck pond.                           |
| cross             | いらいらした     | Dad snapped, tired and cross.                            |
| helping           | 一杯、一盛      | She was seen to have two helpings of roast and four veg. |



## Chapter Four

### Summary

Chrestomanci 一家が南フランスから帰宅する。Julia(Chrestomanci の娘)と Janet は馬の話ばかりで Cat はうんざり。Julia と Janet は Roger と Cat を言いくるめて、Chrestomanci に馬を買ってもらおうよう頼みに行く。(63 - 64)

Chrestomanci は相手にしようとしなが、Millie は子供たちの願いに理解を示す。Chrestomanci は Roger と Cat にも何が欲しいか聞く。Roger は自転車欲しいと言い、Cat は何もいらないと答える。そして、Julia と Janet に馬の世話諸々することを約束させて、買うことを許した。(65 - 67)

城に着くと、Chrestomanci はすぐに自転車や馬の手配をする。隣国で Prendergast という魔法使いが Syracuse という馬を若干安く売り出しているというので、Joss を向かわせる。出発する前に Joss が stableyard に行くと、Julia と Janet が馬用の場所を探して、大きな倉庫(実際は Jason の植物やいろんな世界から集めた種を stasis spell のもとで収納している倉庫)を開けようとしているところだった。Joss は、Jason の倉庫だからと注意して、そんな余計な心配はしないようにと言い、明日その馬がやってくるだろうと告げる。二人は「乗馬服!!」と Millie の元へ疾走した。(68 - 69)

Millie は、Joss を Bowbridge railway station で降ろしてから、二人と乗馬服を買いに行く。Janet は乗馬服の値段に気後れしていると Cat にこっそり言うのであった。

翌朝 Roger の自転車が届く。最初 Roger は喜ぶが、乗り方が分からず戸惑う。そして何回も失敗を繰り返す。午後早く、Syracuse がやって来た! Syracuse にかかっていた魔法が全て城の魔法で打ち消され、ある種の電氣的振動が流れ、自分の部屋にいた Cat も面白くなってすぐ下へ駆け下りていった。芝生に到着すると、Syracuse はいつのまにか Joss から逃げ出していて、Joss や stableboy、二人の従僕、庭師に追いかけていた。Syracuse は美しく、逃げ方も賢かった。ようやく捕まえられそうになった時、自転車に乗れるようになった Roger がやって来て、コントロールを失い、Syracuse の前に倒れる。(要するに邪魔をしたんですね) Syracuse は Roger を飛び越えて、違う方向へと走って行った。Syracuse の入って行ったバラ園に一番近かった Cat は Syracuse とは逆向きの道を選んで、うまく正面でぶつかる。Joss が追いつく前に、Cat と Syracuse の意思が疎通する。(Syracuse の “Peppermint?” と言った心の声が Cat に伝わったり・・・) Syracuse は Joss が連れて帰り、Cat は Roger を助けに戻る。(71 - 75)

翌朝、Janet と Julia が新品の乗馬服を着て現れる。Cat は二人の安全のために呼ばれていた。が、Janet は Syracuse を見て、恐れ、泣きながら城に走って帰って行った。馬のことで落ち込む Janet を Millie がなぐさめて、ようやく Janet の気持はほぐれる。(重要個所：訳参照)

一方 Julia が Syracuse に乗っても、Syracuse は危険な行動を繰り返す。それでも、Julia はプライドと頑固さと、一人で Syracuse を所有しているという考えであきらめなかったため、Cat は Julia

を乗馬中いつも守るはめに。その様子を見た Chrestomanci はこっそり Julia と Janet のために自転車を手配する。

二日後、Joss は Julia を呼び、より広い所で Syracuse と上手くいくかどうかを見ようとした。すると、Syracuse は Julia を乗せたまま、馬具収納室の低い戸へ走り込もうとした。そのため危うく Julia は打ち首になりそうになる。間一髪で自分自身を stable の屋根に levitate させ、助かる。Julia の馬に対する感情は一瞬にして最悪になり、馬を選んだ Chrestomanci に対しても怒る。Chrestomanci は弁解し、新しく別の馬を手に入れることを提案するも、Julia は馬はもうたくさんだと言う。そんな中、Cat が Syracuse を欲しいと発言。Chrestomanci は Cat に責任を預けた。(重要箇所：訳参照)

Julia は初めそんなの不公平よと言うが、Cat が Syracuse に乗ることで、彼らは実際のところベストな組み合わせであることが実証された。Chrestomanci も Julia も認め、Cat に祝福の言葉をなげかける。(76 - 82)

## Words and Phrases

|                          |           |   |
|--------------------------|-----------|---|
| promising                | 見込みのある    | This was not promising, but, having started both    |
| eloquent                 | 雄弁        | Janet and Julia suddenly became very eloquent       |
| desperate                | 必死の       | about their desperate need for horses.              |
| devastated               | うちひしがれた   | I shall never forget how devastated I was.          |
| disgust                  | 嫌悪、うんざり   | To Roger's disgust, ---                             |
| decent                   | 立派な       | Predergast had a decent small horse.                |
| fuss                     | 大騒ぎ       | It seemed to him to be a stupid fuss.               |
| wince                    | たじろぐ      | Cat winced again.                                   |
| before long              | まもなく      | Before long, they were organised into a circle      |
| it stands to reason that | ～は理にかなう   | It sood to reasom that Syrascuse would run.         |
| conjure                  | 呪文で呼び出す   | He conjured a peppermint.                           |
| get on with              | うまくやる     | A lot of people find they can't get on with horses. |
| give vent to             | (感情を)表に出す | Julia gave vent to her feelings.                    |

## 重要範囲全訳

**“Millie found her there ----- ‘That’s better,’ said Millie.” 77-78**

Millie は彼女がそこにいるのを見つけた。彼女は、ぐしゃぐしゃのベッドに腰かけ泣きじゃくっていた。

「そんなに深刻に悩まないで。」そう言って Janet の隣に座った。

「馬と上手くやっていけないと気付く人なんて多くいるわ。Chrestomanci だって出来るとは思わないもの、わかるでしょ？彼はいつも馬は臭いのせいで嫌いだって言うけれど、それよりもっとある(それだけじゃない)と思うもの。」

「でも恥ずかしく思うわ！」Janet は涙を流した。「有名な騎手になることをたくさん話していたのに、今じゃ馬の近くに行くことさえ出来ないなんて！」

「だけど、試してみるまで分かることが出来たかしら。」Millie は尋ねた。「だれだってどういう風に生まれついたかをどうこうすることはできないわ。代わりに何か得意なものを考えなければならないだけよ。」

「だけど、」Janet はそう言って、恥ずかしいと思う気持ちの核心を言った。「あんなに騒ぎたてて、Chrestomanci にあのお金を全部馬に使わせてしまったのよ、何にもならなかったのに。」

「Julia も同じくらい騒ぎたてていたと思うわよ。」Millie は言った。「結局彼女のために馬を買ったことになったわね。」

「それに、この服も。」Janet は言う。「とても高かったのに。もう二度と着ることはないなんて。」

「そんなの大したことじゃないわよ。」Millie は彼女に言った。「服は他の誰かにあげられるかもしれないし。五分で、最小限の魔法で Julia の二着目に あるいは他に誰か乗りたい人のために変えることも出来るわ。Rodger も乗りたいと思うかもしれないしね。」

Janet は Roger が彼女の服を着て Syracuse に乗っていることを考えて、自分がくすくす笑っていることに気づいた。それは全ての Related Worlds で最もありえないことのように思えた。

「その方がいいわ。」Millie は言った。

“I hate this horse!”-----help Julia down on the roof.” 80-81

「この馬なんて嫌い！犬のえさに値するわ！最悪だわ！」

「その通りだ。」Chrestomanci は言った。素晴らしいチャコールグレー色のスーツを着て Cat の隣に現れた。

「お前のために本当の馬を手に入れてもらいたいかい？」

「お父さんも嫌いよ！」Julia は叫んだ。「私たちが馬を欲しがるなんて全くばかげていると思ったからこの馬を用意したんでしょ！」

「Julia,それは間違っているよ。」Chrestomanci は否定した。「私はお前たちがばかげていると思ったとも。だが、honest 本当にやってみて Prendergast に騙されたのだよ。もしお前が望むなら、太っていて大人しく、年老いたやつを手に入れてみよう。そしてこれは獣医の元へ送ろう。彼(おそらく獣医を指す)の名前は何かだったけ？」Chrestomanci は Joss に尋ねた。

「Mr.Vastion です。」Syracuse の揺れている頭から垂れている革のひもをほどきながら Joss は言った。

「いいえ！」「どんな馬ももうたくさんだわ！」Julia は言った。

「Mr.Vastion を。それなら。」Chrestomanci は言った。

Cat は Syracuse ほどに美しく生き生きしたものが犬のえさに変えられてしまうことを考えるのに堪えられなかった。

「僕がもらってもいいかな？」Cat は言った。Syracuse も含め、皆が驚いて彼を見た。

「獣医が欲しいのかい？」Chrestomanci が言った。

「いや、Syracuse だよ。」Cat は言った。

「それなら、君の責任ですよ。」Chrestomanci は肩をすくめ、Julia が屋根から降りるのを手伝おうと向きを変えた。

## Chapter Five

### Summary

Cat が筋肉痛に悩みながら部屋でベッドに座っていると、部屋のドアをノックする者がいた。やって来たのは、Roger と同年代の靴磨き、Joe Pinhoe である。Joe は、Cat が本当に enchanter なのかを確かめたいらしい。そこで、城で魔法を使うことが禁じられているにもかかわらず、Cat は Joe を天井まで浮遊させてしまう。Cat の魔法はとても強く、Joe が降りようと必死に魔法を使うも、全く Joe の体は下に降りる気配がない。Cat がさらに、Joe を窓の外から飛び出させて木のところまで浮遊させようとしていたところ、Chrestomanci に見つかってしまう。

Joe は、自分が Cat に enchanter である証明をするよう頼んだことを主張する。Chrestomanci は、Cat に Joe を降ろすよう命じた後、Joe には立ち去るように命じる。その後 Cat に対して、「強い enchanter であっても、自分の強さによって敗れる事がある」と注意する。結局、Cat はペナルティとして、魔法理論の補習を受けさせられる。その内容は performative speech についてだが、Cat は集中することが出来ない。

翌朝、Cat と Joe は再会する。Joe は Cat が面倒なことに巻き込まれなかったか心配するが、補習だけだと聞いて安堵する。

Cat には、Syracuse について2つの問題が発生している。1つは、Syracuse は魔法が苦手であるため、全て手作業で世話をしなければならないこと。もう1つは、外に出て思う存分乗馬することが許されていないため、とても退屈となっていることだ。Syracuse に魔法を使う代わりに Cat は自信に筋肉を鍛える魔法などを使い、根気よく練習を続ける。

そして程なくして、Cat は Syracuse に乗って本格的な遠乗りに行くことが許された。そこで早速 Cat と Joss Callow が Home Wood を走るが、Home Wood はどこか変で、深みという物が感じられない。すると、突然 Syracuse が立ち止まる。死んだ動物たちが釘打ちされた木の枠が置いてあったからだ。Cat は Joss に聞こうとするが、そこに大きな銃を持った Mr Farleigh が現れる。彼は、木の枠を見せしめの絞首台だといい、自分の領域に Cat たちを入れたことに対して Joss に苦言を呈し去っていった。

そんなとき、どこからともなく「ここから出して」という声が Cat に聞こえてきて、青い空間が動いている様子がそれとなく見える。声によると、木の枠が彼らを閉じこめているらしいが、Cat の魔法でもってさえ木の枠はほんの少ししか動かせず、完全にはその声の主達を救ってあげることが出来なかったことを感じ取る。

Cat は、その出来事が頭から離れなかったが、誰にもあの奇妙な話をすることはできなかった。唯一、丘の上の森 (Ulverscout Wood) に行こうと Roger のことを誘ったときに、Mr.Farleigh の話をする。結局、2人は Joss に知られないよう彼が休みの日に Ulverscout Wood に行くことを決める。

## 範囲全訳

“Both of them looked round -----how strong you are.” 86-88

2人ともふり返って Chrestomanci がそこに立っているのを見つけた。それは、Chrestmanci が、Joe の顔を真っ直ぐのぞき込んでいるようにみえるくらい、彼がとても背の高くみえる瞬間の一つだった。そして、Joe はそのとき、15 feet の空中にいたのだ。

「私は思うんだが」Chrestomanci は言った。「君は、飛びたいという大望を何か他の手段でかなえるべきだろう、少年。Eric は城の中で魔法を使うことを厳しく禁止されているんだ。そうだろう、Cat？」

「あー」Cat は言った。

Joe は真っ白い顔で言った。「彼のせいじゃ無いんです。えっと、卿。僕が彼に彼が Enchanter 魔法使いであることを証明してくれと言ったんです、おわかりでしょう。」

「証明が必要なのかい？」Chrestomanci は尋ねた。

「僕にとっては。」Joe は言った。「ここに来て新しいですから。つまり、彼を見てください。あなたは、彼が Enchanter 魔法使いにみえると思いますか？」

Chrestomanci は、思索した様子で Cat の方へ顔を向けた。「彼らは、色んな形や大きさに現れる。」彼は言った。「Cat の場合、ちょうど Cat のような他の8人の人達が他の世界で生まれ損ねたか、生まれるときに死んでしまったかしているんだ。きっとそのほとんどが同じく魔法使いだったのだろう。Cat は9人分の魔法を持っているのだよ。」

「一緒に押し詰められたみたいなものか。分かったよ」Joe は言った。「そんなに強いのも不思議じゃないな。」

「そうだ。ああ。この困った問題も落ち着いたな。」Chrestomanci は言った。「できたら、Eric、友達を下までおろしてくれるだろうね。彼が定められた仕事に取りかかれるように。」

Cat は Joe ににやっと笑ってカーペットの上にやさしく降ろした。

「行きなさい」Chrestomanci は彼に言った。

「つまり、僕をクビにしないということですか？」Joe が、疑うように尋ねた。

「クビになりたいのかね」Chrestomanci は言った。

「はい」と Joe。

「それなら、君にとって、疑いなくとてもつまらない仕事をしていいと許すのは、君への十分な罰になるようだね。」Chrestomanci は彼に言った。「さぁ行きなさい。」

「くそ！」身をかがめて、Joe は言った。

Chrestomanci は、Joe が前屈みに部屋を出て行くのを見た。「なんてエキセントリックな少年なんだ」ドアがついに閉められたとき、彼は言った。彼は Cat の方に向き直った。もっと楽しそうでない様子だった。

「Cat、、、」  
「分かってる」Cat はいった。「でも、信じてくれなかったんだ」  
「長靴を履いたねこの話をよんだことがあるかね」Chrestomanci は彼に聞いた。  
「うん」Cat は不思議に思って言った。  
「それなら、あの人食い鬼が、何か大きなものになろうして、食べられちゃうくらい小さいものにな  
って殺されてしまったことを覚えているだろう」  
「注意しなさい、Cat」  
「でも、」Cat は言った。  
「私が言いたいのは」Chrestomanci はつづけた。  
「それは、一番強い魔法使いでさえも、彼自身の強さを自分自身にたいして使ってしまうことで破れ  
ることがある。私はあの少年が・・・」  
「うん、彼はちがった。」Cat は言った。「彼は、ただ興味があっただけなんだ。彼自身も魔法使って  
いたし、どのくらい強いかはどれくらい大きいかによって決まると思ってるみたいなんだ。(意識)」

## Words and Phrases

|                        |           |  |
|------------------------|-----------|--|
| Numb                   | 麻痺した      | He make himself numb from the neck down            |
| hesitation             | ためらい      | There was a feeling of hesitation.                 |
| temporary              | 臨時の       | Joe was a temporary boot boy.                      |
| hostile                | 敵意のある     | Joe looked hostile and aggressive.                 |
| fed up                 | うんざりして    | He was fed up at the way other people think of him |
| be impressed           | 感動する      | She is impressed with the beautiful magic          |
| be so good as to       | (婉曲な依頼表現) | You would be as good as to fetch your friend.      |
| give somebody the sack | くびにする     | Chrestomanci did not give Joe the sack.            |
| concentrate on         | 集中する      | He could hardly concentrated on the lesson         |
| in spite of            | ～にもかかわず   | Cat try to look patient in spite of being bored.   |
| boredom                | 退屈さ       | The other part of the problem was boredom.         |
| be inclined to         | ～したいと思う   | Syracuse was inclined to dance.                    |
| consent                | 承諾する      | Syracuse consented to slow to mere trot.           |
| cardboard              | 厚紙        | It was like cardboard scenery, missing depth.      |
| be liable to           | ～しがちである   | Syracuse was already liable to surge sideways.     |
| gamekeeper             | 狩猟管理人     | Jed Farleigh is a gamekeeper.                      |
| misery                 | みじめさ      | He felt misery from the cloudiness.                |

Written and Edited by Morika O.

Special Thanks to the awesome writers Ayumi T., Tsubasa K.